The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Fifty-year Time Trends in Blood Pressures, Body Mass Index and their Relations in a Japanese Community : The Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS)
Author(s)	堀, 幸
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61638
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　　名 Name	堀　幸
論文題名 Title	Fifty-year Time Trends in Blood Pressures, Body Mass Index and their Relations in a Japanese Community: The Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS) (地域住民における血圧値と肥満との関連の長期的推移：CIRCS研究)

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

日本人の血圧値は1965年頃に最も高くなり、それ以降は男女ともに減少している。一方で、Body mass index (BMI)値は、男性において近年上昇しており、肥満者の増加が血圧値に及ぼす影響が懸念される。本研究では、秋田県の一農村における50年間の高血圧の有所見率の長期的推移を肥満の有無別に検討した。

〔方　法(Methods)〕

1963～2013年の秋田県井川町における40～79歳の健診受診者について、約4年毎に11期に分け、最大血圧(SBP)、最小血圧(DBP)の年齢調整平均値(mmHg)、高血圧(SBP≧140/DBP≧90、または服薬中)の有病割合の推移を肥満(BMI(kg/m^2)≧25)の有無別に検討した。年齢調整平均値は、mixed effects modelling を用いて分析した。SBP、DBPともに1回目に測定された値を用いた。

〔成　績(Results)〕

60歳代の男性のSBP/DBPの平均値は、1963-66年の160/89から1984-87年の141/83へ一貫して低下し、その後は2009-2013年の132/80まで漸減・横ばいであった。60歳代の女性も1963-66年の155/86から1984-87年には142/82に低下し、その後は2009-13年の132/78まで漸減・横ばいで推移した。全年代において、受診者全体に占める高血圧者の割合は、男女とも血圧値と同様に1980年にかけて大きく減少し、その後横ばいであった。一方で、BMIの平均値は男性の全年代および女性の60歳代、70歳代で増加した。肥満を伴う高血圧の割合は、60歳代の男女で増加していたが、2009-13年では肥満を伴わない高血圧の割合の方が多かった。

〔総　括(Conclusion)〕

過去50年間で男女とも高血圧の有病割合は減少したが、肥満を伴う高血圧の増加が認められた。また、男女とも肥満を伴わない高血圧の有病割合は減少したが、2009-13年の時点では肥満を伴う高血圧の有病割合よりも多かった。従って、高血圧予防の観点から、肥満対策に加えて非肥満高血圧者への対策も重要である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）　堀　幸

		（職）	氏　　名
論文審査担当者	主　査	大阪大学教授	磯　博康
	副　査	大阪大学教授	桑木　紘実
	副　査	大阪大学教授	坂田　泰史

論文審査の結果の要旨

日本人の血圧値は1965年頃に最も高くなり、それ以降は男女ともに減少している。一方で、Body mass index (BMI)値は、男性において近年上昇しており、肥満者の増加が血圧値に及ぼす影響が懸念される。本研究では、秋田県の一農村における50年間の高血圧の有所見率の長期的推移を肥満の有無別に検討した。

1963～2013年の秋田県井川町における40～79歳の健診受診者について、最大血圧(SBP)、最小血圧(DBP)の年齢調整平均値(mmHg)、高血圧(SBP≧140/DBP≧90、または服薬中)の有病割合の推移を肥満(BMI(kg/m2)≧25)の有無別に検討した。その結果、50年間で男女とも高血圧の有病割合は減少したが、肥満を伴う高血圧の増加が認められた。また、男女とも肥満を伴わない高血圧の有病割合は減少したが、2009-13年の時点では肥満を伴う高血圧の有病割合よりも多かった。従って、高血圧予防の観点から、肥満対策に加えて非肥満高血圧者の対策の重要性が示唆された。これらの結果は、今後の高血圧対策に資するものであり、学位の授与に値するものである。